

僕のヒーローアカデミア WE ARE LETHAL  
PROTECTOR !

のろまな怪獣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

OK、もう一度だけ説明してやる

俺たちの名前は江都辺 陸とヴエノム

山の中にあつた隕石触つてから26年

この世でただ1人のリーサル・プロテクターだ

チームリーダーと戦い、万引き犯を捕まえて、殺人鬼に…

これはやめとこう

とにかく俺たちは最高で…そして最悪

今までも、そしてこれからも

ちなみに最近のハマリは粒状のカラフルなチョコ

目

次

N o.	N o.	41	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.	N o.
8	7		6	5	· 4	3	2	1
暴動の兆し			平和の象徴	B A D	D A Y	噂の怪物	オレ達	血塗れた手
埋まりし欠片たち			V S					
—			最惡の怪物					
55	48					31	23	14
							5	1

# N o . 1 プロローグ

「江都辺えとべ 陸りく くんだね？」

「：誰だ？あんた」

「私はヒーロー公安委員会の者だ。君をスカウトに来たんだよ」

「スカウト…？」

男は“オレ”に手を差し伸べる

頭のない死体の真ん中に突っ立つて血まみれの俺にだ

「…いいのかよ、ヒーロー仕切ってる人だろ？」

「この世界を守るために君が必要なんだ。それに君、調べたところ悪人しか殺していいな  
いだろう？」

俺たちは血溜まりを歩き出す

「…俺たちは飢えてるんだ」

「俺たち…？」

「俺たちは…あの日以来ずっと腹が減るんだ。頭も痛くて…体も冷えて。…そしたら  
こいつらが“オレたち”に襲いかかってきた。この人たちだけじゃない、他にも…大勢

…

俺たちの喋りに異常に気づき、後ずさりするヒーロー公安の会長  
 「俺はあいつと約束したんだ、悪いやつしか食べたらダメだつて：人を殺したやつや苦しめているやつだけしか食べたらダメだつて。” オレ” はそれを受け入れたが：食える量が少ない」

自分の手を見つめ、その汚れた手を公安の男に向けて差し出す

「……オレに食事を用意してくれるんだよな、飛びつきりの悪人を用意してくれよ。俺は悪いやつを減らせるなら…それでいい」

その時の俺たちはどんな顔してたんだろうな  
 きつと素晴らしい笑顔だつたはずだ

突如人間に発現した超常的な能力” 個性”

その力は生まれつき備わっており、ほぼ4歳までに発現し、両親どちらかの ”個性” 、  
 あるいは複合的な ”個性” を宿すことが多い。

そんな力を悪用し、自分のために使う者” 敵”  
 そんな力を善用し、他を救う” 英雄”  
 だが” 敵” の中には” 英雄” のような奴がいる

ヒーローじゃないが人を救い、世の中変えようとするやつが  
その逆もまた然り

”英雄”だが”敵”のような奴がいる

ヒーローになつたが人を騙し、私腹を肥す大馬鹿が  
「もうそろそろ時間だな、ほら起きろ」

「腹が減つて死にそうだ」

「今日は1件だがその分フェネルチルアミンの量は多いぞ。腹いっぱいになれる」

「そりや楽しみだ。最近はあんまり暴れてなかつたからな」

相棒は高らかに笑い、首を伸ばしながら舌なめずりをする

「陸！あいつらだろ、帰ってきたな!!」

「荷物がたんまり。いかにも作戦前夜つて感じがする」

「その作戦は無駄になつちまうがな」

月明かりもない真つ暗な夜、俺たちは動きはじめる

よく言うだろ？毒を以て毒を制すつて

俺たちはその中でもトップクラス、猛毒だ

猛毒を以て毒を制すのさ

「行くぞ、相棒」

「ああ、一氣に行こう」

これは

俺たちが最悪最凶のヒーローになる物語

## N o . 2 血塗れた手

「はあ…お疲れ、相棒」

「気にするな、オレは腹と欲を満たせた」

仕事を終え、公安本部へと戻った江都辺は自販機前にあるベンチに座つて相棒と話す

「それよりお前、またナガンの仕事を変わりにしてただろう？なんでだ？」

「お前の食いたい、暴れたい欲を満たすためだろがい!!!って言いたいところだが……」

江都辺はコーヒー缶の中身を一気に飲み干し、潰してからゴミ箱に放り投げる

「…ナガンさ、最近元気ないんだよ。なんか悩んでるっぽい。だから最近のあいつの仕事は全部俺が貰つてんの」

「お前に女の悩みを解決できるとは思えんがな。縁もゆかりもなかつたお前に」

相棒は笑いながら江都辺を煽り、それに対しても江都辺は額に青筋を浮かべる

「よし表出して來い。ボコボコにしてやる」

「お前には無理だ。オレは強い」

「何してんだ？お前…」

2人の喧嘩が始まる直前、髪を下ろしたレディ・ナガンが現れる

「うお!? や、やあナガン」

「でけエ声でわーわーと：もつと静かに話すか部屋にいきな」

「ごもつともです：」

「相変わらず気の強い女だ」

「……なあ、お前は：この仕事を続けて何になると思う?」

「な、なんだいきなり」

「いいから答えてくれ」

(ああ、やつぱり…)

虚ろな目で外を眺めながら、江都辺に質問するナガン

その目の下には大きな隈、ほんの少しだが頬が瘦けていた

「お前、すつごい優しいな」

「：おい、質問に」

「正直に言つてなんにもならんな。薄っぺらく、脆い世界。それを維持するのがオレ達

の役目だが：正直こんなの続けたところでいつか崩れ去つちまう」

自販機で新たに購入したオレンジジュースをナガンに向けて投げる

「だがこの事実を世間に流せば、この超人社会は一気に瓦解するだろう。オレ達にはど

うすることも出来ない』

江都辺の相棒がそう言うとナガンは下を向き、オレンジジュースのペットボトルを強く握り締めていた

「ナガン、手が汚れてると思ってるのか？心配するな、その手は汚れてない」

『汚れてない…？ふざけたこと言うな!!』

レディナガンはペットボトルを地面にたたきつけ、下を向きながら江都辺に近づき胸ぐらを掴む

『綺麗事言いやがつて!!吐き気がするんだよ!!お前も所詮は…!!』

『俺は…；俺たち』はもう戻れない

江都辺は優しく微笑んで震えるナガンの手を優しく掴み、ゆっくりと下ろした  
『お前は、俺たち』と違う、まだやり直せる。いいか、明日でも明後日でも…なんなら今すぐにでも会長と話つけに行くぞ。この薄汚れた闇を知ってるお前にしかできないことがある』

『私は…私は…』

そう話していると突然会長から呼び出される

『…はい、もしもし』

『急で済まないが、来てくれ』

「ちょうど良かつた！オレ達もお前に話したいことがあつたんだ！ナガンを連れて行つてもいいか？」

『…君のそばにいるのか？丁度いい。彼女も呼ばうとしていたんだ。そのまま連れてきてくれ』

「わかりました。今向かいます」

電話切り、江都辺は床に座り込んだナガンを優しく立たせる

「話つけに行こう。ナガン」

「もしわかつて貰えなかつたらオレ達が何とかしてやる」

♪ナガン said

出会つた頃からこいつはおかしい奴だつた

いつもブツブツとなにか喋つてる

なのに戦闘スキルが高く、私の攻撃もいとも簡単に避けちまう

「お前、近づかれたら弱すぎる」

「そうだなあ、今日は体術をメインに鍛えてもらおう」

同じ声なのに、同じ顔なのに

まるで2人いるみたいに

厳しい言葉をかけてきたと思えば今度はアドバイスをしてくる  
イカれたやつだと思つてた

月日は流れ、私がヒーローとして人々から慕われるようになつた  
私はヒーローとして、ヒーロー社会の調和を保つ部品として

戦い続けた

正しいことをしていると自分の心に言いつけながら  
だがある日

「レディー！ 握手してー！！」

「おーう、特別だぞ」

小さな子供たちにいつもと変わらず握手をしようとした

その時

私の手は酷く汚れていた

血まみれだつた

私はすぐさま手を引き、その場を去る

家に帰つて、何も無い部屋で、一人暗い中、手を洗い続ける

「落ちない…落ちない…！」

シャワーに入つた

風呂にも

でも落ちない

その汚れは私に染み付いていた

もう二度と落ちることがない、私が犯してきた罪の証

私は1人、部屋の片隅で座り込む

「……疲れた」

窓から見える外の光

今日見た子供の笑顔

それら全ての脆さに目眩がした

「偽りの…世界…」

私は立ち上がり、公安本部へと向かつた

話をしに行こう、会長と

それでもうやめにしよう

「欲を満たすためだろがい!!!って言いたいところが……」

そう思つて本部の中へとはいると、自販機の方から声が聞こえてきた  
江都辺だ

最近あつてなかつたがやつはまた一人で話している

「ナガンさ、最近元気ないんだよ。なんか悩んでるつぽい。だから最近のあいつの仕事は全部俺が貰つてんの」

その言葉を聞いて驚いた

なんでそんなことする？

おまえは辛くないのか？

この仕事になんの不満もないのか？

気づいた時には江都辺の後ろに立つていた

そして質問していた

お前はこの仕事を続けて何になると思う？ つて

「正直に言つてなんにもならんな。薄っぺらく、脆い世界。それを維持するのがオレ達の役目だが：正直こんなのは続けたところでいつか崩れ去つちまう」

ああ、やっぱりそうか

「だがこの事実を世間に流せば、この超人社会は一気に瓦解するだろう。オレ達にはどうすることも出来ない」

何も出来ない、何にもならない

それなら一体私は何をしてるって言うんだ

なんのために戦つてたんだ…！」

受け取ったオレンジジュースをにぎりつぶす勢いで力を込めていると江都辺は私の手は汚れてないと言つた

「汚れてない…？ふざけたこと言うな!!」

声を荒らげ、ペットボトルを地面にたたきつけた私は下を向いて江都辺の胸ぐらを掴む

「綺麗事言いやがつて!!吐き気がするんだよ!!お前も所詮は…!!」

顔を上げた瞬間、私はハツとする

「俺は…；俺たち”はもう戻れない」

やつの顔は微笑んでいるにもかかわらずどこか悲しい顔で、私の手を優しく掴んで下ろす

「お前は”俺たち”と違う、まだやり直せる。いいか、明日でも明後日でも…なんなら今すぐにでも会長と話つけに行くぞ。この薄汚れた闇を知つてお前にしかできないことがある」

その言葉にわたしは座り込んで頭を抱えた

「私は…私は…」

江都辺の言葉が私の中でいっぱいになる

こんな私でも…まだヒーローになれる…?

闇を知ってる私にしかできないことなんて本当にあるのか?

「話つけに行こう。ナガン」

「もしわかつて貰えなかつたらオレ達が何とかしてやる」

その言葉と江都辺の大きな手が

私の不安の塊をどかし

私の心に光となつて差し込んだ

## N O . 3 オレ達

会長の元に近づく度にナガンの息が荒くなる

「ナガン、落ち着け。深呼吸しろ」

「で、でも」

「絶対だ。俺達が絶対守るから」

「大船に乗つたつもりでオレ達の後ろにいろ」

俺たちは手を握り、会長の部屋の扉を開けた

会長はいつも通り笑顔で俺たちに話しかけてくる

「2人とも、よく来た」

「オレの時間を無駄にするなよ？今から家に帰つて録り溜めてたバラエティ見るんだ。  
箱買いしたチョコレートを食いながらな」

「……今回の仕事なんだが」

「ナガンを公安直属ヒーローから個人事務所のヒーローにして欲しいです」

会長の話を遮り、江都辺が大きな声で言い放つたその一言で場の空気が一変した

「辞めるということかね？」

「ああ、ナガンは辞める」

「そうか…だが辞めるということが何を意味するか知っているだろう?」

会長は懐に手を入れ、何かを触るがそれよりも早く江都辺は胸ポケットからUSBメモリを取りだし、ニヤリと笑う

「それをさせない為に俺達がいます」

「これの中には今まで俺達が殺してきた奴らについての情報とそれを俺達に指示したあなたの声が入っています」

「なっ!?

会長と共にナガンも驚き、江都辺の肩を掴んだ

「江都辺、お前」

「ナガンは黙つてな。オレ達の要望が飲めないのならこれを今すぐ流出する。さあどうする? 賢いアンタならわかると思うがこれが出来れば:日本は一体どうなるだろうな?」

USBを見せびらかす江都辺に対し、会長は額に青筋を立てて怒鳴った

「1人のために大勢を捨てるのか!!」

しかし、江都辺は表情を変えずに言い放つ

「いずれ崩れる世界ならいつ壊れたって同じだろうよ」

会長の顔は怒りから焦りへと変わり、江都辺を睨みつける

「ナガンが抜けた分、俺達が倍以上に働きます。だからお願ひします」

深々と頭を下げるが会長は懐からスイッチを何かの取り出し、押し込む

すると突如として壁が開き、その中から銃が出てくると同時に江都辺の頭と胸を撃ち

抜いた

「江都辺ッ!!」

ナガンはすぐさま個性を発動し腕をライフルのように変形させ、会長目掛けて自分の髪の弾丸を放とうとするが自分の体に赤いポインターが当たっていることに気がつく

く

「動かない方がいい。それはタルタロスにある銃と同じものだ。少しでも動けば足や腕、最悪江都辺と同じように頭が吹き飛ぶ」

会長は頭を書きながら机の上に置いてあるものを床に叩きつけて叫び始める

「はあ…江都辺、君には失望したよ。やはりその正義感が君の価値を落としていたようだ」

「会長…お前!!」

「ナガン、君の様子は漏らさず全て知っているんだよ。家やパトロール中を含めて全て…様子がおかしかったからね。君には…消えてもらおうと思つてたんだよ」

「お前：江都辺を呼んだのは私を殺させるためか」

「ああ、でも彼も道具にはなりきれてなかつたみたいだ。幼い頃から育てたが：やはりダメみたいだな」

「道具だと…!？」

「いいかい？ 君たちは道具、この世界の均衡を保つための歯車なんだ。自我を持つちゃいけないよ。君たちは私の言う通りにしてればいいんだ」

ナガンは絶句した

自分たちは人ですら思われていなかつたと

初めてスカウトされ、自分のこの個性を

コンプレックスだつたこの腕を褒めてくれた彼は  
ナガンたちをものだと言つたことに

「ふ…ざけるなああ!!」

会長に狙いを定めた瞬間、肩と足を撃ち抜かれる

「うあっ…！」

「…2人もかけてしまつた。また新しい部品を用意しなければ…」

「その必要はねえな」

どこからともなく聞こえる声

「何だ…？」

「頭と胸撃ちやがつてこの外道が」

「なんで生きてる?」

会長が振り返るとそこには何事もなかつたかのように立つ江都辺の姿があつた  
「…あんたは言つたよな、この世界を守るために俺が必要だと」

「お前の個性は増強系の個性のはずだ! 初めてあつた時も、検査でもお前はそのパワー  
で…」

会長は思い出す

検査中に突如苦しみ出した江都辺が装置を破壊し、その後の検査で増強系の個性と診  
断されたこと、そして初めてであつた時、敵たちが頭や内蔵が原型をとどめないほどの  
力で吹き飛ばされていることを

「オレは…飢えてる。そして救いたいんだ。この美しく、素晴らしい世界を」

江都辺の体に黒い粘液のようなものがうねりだし、会長の首を掴んで壁に叩きつける

「がはつ…な、なぜ銃が反応しない!?」

「オレは個性じやないからな!!!」

今度は会長を床に叩きつけて、顔の近くまで持つてくる

「あんたを信じてた。俺のやつてる事には意味があると言ひ聞かせてた」

次は扉、そして最後に天井にたたきつけたあとに江都辺の顔の前に吊り下げられる  
「ぐう……がはつ……」

「おいおいどうした？ 隨分苦しそうじゃないか？」

「お前は……なんなんだ……」

「俺：オレは……いや、俺達は」

江都辺の周りから出ていた黒い粘液は江都辺を包み込む  
「うあ、あああ……」

江都辺の体はひとまわりふたまわり大きくなつた

顔には鋭く大きな牙と大きな目が会長を睨みつけている

筋肉質な漆黒の体には白い筋が走り、手は会長の頭を包めるほどの大ささに

「だ、誰か!! 助けてくれえ!!」

「会長、貴方には育ててもらつた恩がある。でも、そんなもんでカバーできぬほどあんたはクズだ」

顔が半分江都辺になるがすぐさま黒い粘液に包まれ、会長の顔を長い舌で舐める  
会長は恐怖し、必死に逃げようと抵抗するがその太い腕をどうにかできる訳もなく

「目ん玉に肺、臍臍……ハハハ！ご馳走だらけだ。一氣に行こう」

「ま、待て!!待つてく」

口が裂け、会長の頭は包み込まれた  
グチャリ、バギバキ

酷い音を立てながら

「江都辺…?」

「…いや、違う。俺達はヴエノムだ」

長い舌で顔の周りを舐め、ナガンを担ぐ

「うわっ、何すんだよ」

「逃走する」

顔が再び半分に割れてヴエノムから江都辺の顔が現れる

「言う通りにしてくれ、ナガン。俺達は会長を殺した、たまたまその場にいたお前を人質にして俺達は公安から逃走」

「待て！それじゃお前だけが悪人に!!」

「気にすんな、オレ達は前の生活に戻るだけだ」

「ダメだ、私も」

ヴエノムはナガンの口を塞ぎ、背中に貼り付けて窓から飛び出す

手で壁を削りながら下に降り、ビルに飛びつきながらヴエノムは逃げ出す

「ナガン、お前は希望になるんだ。公安みたいなクソちつちやい檻の中にいるべきじやねえ。それに俺たちみたいになつて欲しくない」

何かを必死に訴えかけているがそのままスルーし話し続ける

「この先曲がつたらお前を降ろしてオレ達は下水道に」

次の壁に乗り移ろうとすると赤く燃え上がる炎が横切った

「ぎやあああああ!?」

「見つけたぞ、敵!!」

「俺たちの天敵…火だるま親父の登場だな」

空からエンデヴァーが派手に着地し、あまりの熱でコンクリートの形が変わっていた

「レディ・ナガンを解放し今すぐ投降しろ

「嫌だと言つたら?」

「貴様をここで燃やし尽くす」

「ハハ、ヒーローとは思えねえセリフだ。オレ達には人質がいるんだぜ?」

ヴエノムは悪役に徹するため長い舌で背中に貼り付けていたナガンを前に移動させ、顔を舐める

「貴様ツ…！」

「そんなにこいつを返して欲しいか？なら…」

オレ達はナガンを粘液で拘束したままエンデヴァーに向けて投げる

「じゃあな、ナガン」

拘束している粘液の一部を口に変え、耳元で囁く

ナガンは見事、エンデヴァーにクリティカルヒットしヴエノムは路地裏へと消えていく

「くつ！待て!!」

エンデヴァーはナガンの拘束をとき、急いで路地裏へ駆け込む

壁が傷つく音は聞こえるがその姿は完全に闇と同化しており、やがて聞こえていた音も闇へと消えていった

# N O . 4 噂の怪物

—ねえ知ってる?

—悪いやつの頭を食べちゃう怪物のこと

—絶対に悪いやつ、しかも飛びつきりの悪いやつしか襲わないんだって

—例えば殺人鬼とか:ね

「うわああああああ!!」

深夜、誰も通ることがないであろう路地裏に男の悲鳴が響き渡る

男は逆さまになりながら目の前の”怪物”から逃げようとしたばたしている  
だがまるで大木のような太い腕が男の足を握っていたため無意味に終わる

「人のカバンを奪つて拳句の果てに持ち主の彼女に襲いかかろうとしたな? お前みたい  
なやつは人間のクズだ。生きている価値はないよな?」  
「や、やだあ!! 助けてくれええ!!」

男の命乞いに対してヴエノムは長い舌で男の顔を舐め回し、笑いながら誰かに話しか  
ける

「なあ、こいつの頭を引きちぎつてバスケでもしよう。ドリブルで顔の原型が無くなる

くらいにボコボコにしてやろう！」

「ストップだ、ヴエノム」

頭を掴んだ瞬間、ヴエノムの中から江都辺が話しかける

「なんだ？ こいつも食わないのか？」

「ああ、俺らが食べるには人を殺したやつだけだ」

「そうか。こういうのは食った方がいいと思ったが…わかつた」

ヴエノムは男の鼻の中に触手を突っ込み、気絶させる

「これに懲りたらもう二度と女性に近づくなよ！ ケダモノめ！！」

そう言うと男をゴミ箱へ放り込み、カバンを拾って近くに座り込んでいた女性に渡す

「もう心配ない、君のカバンは無事だ。なあに、気にする事はない。当たり前のことをしましたまさ。もうこんなところを歩くなよ？」

ヴエノムは女性の頭を優しく撫でて、壁に爪を立てながら闇の中へ姿を消した

「……き、き、キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

深夜、裏路地から再び叫び声

しかも今度は女性の声が響き渡った

「悪いやつは山ほどいるが：殺人を犯すやつはなかなかいないな」

「オールマイトがいるからなあ、あの人のおかげで日本の犯罪率は6%をキープ出来てるんだ」

あの後、江都辺とヴエノムは近くで1番大きなビルの屋上で食事をしカバンを枕にして星を眺めていた

「それだけじゃない。オレ達が未然に防いでるおかげだろ」

「俺達とナガン、あとホーカスだな。彼らは優秀だ。あそこにいた頃の俺達よりな」

そう言つて江都辺がコーヒーを飲もうとした瞬間にヴエノムが江都辺に頭突きをする

「つだあ!?」

「そんなことないだろ！ オレ達は最強だ!! オールマイトがなんだ！ ナガンやホーカスは確かに優秀だが：オレ達には及ばない!!」

「あんなあ!! だからって頭突きすんな！ 痛てえ……！」

「決めたぞ!! 明日は悪い奴らを沢山捕まえてヒーロー事務所の前に山積みにする!!」

「わかつたわかつた：けどその前にナガンの様子見に行こう」

「なんだ、久しぶりに名前を出したから寂しくなったのか？ それとも嫉妬か？」

「……どつちもかな」

「お前はもつとグイグイいけ。戦いの時はグイグイ行くのに恋になつたらこうだ」「うるせーな！寝るぞ！」

「すぐはぐらかすのも良くないところだぞ、陸」

ヴエノムはニヤニヤ笑いながら陸の中へと入り、2人は眠りについた

—翌朝—

「さあ朝だ！悪人に裁きの鉄槌を下そう！」

「うつし、じゃあまずは…もしもしおばちゃん？」

江都辺が連絡をかけたのは新たなヒーロー公安委員会の会長

『何かしら？』

「裏で敵…つつても有象無象のチンピラたちが動き始めてる。数減らしつつ情報引つ張り出して公安にポイポイしてくからよろしく頼む」

『は？ちょっと待』

ブチッと携帯の電源を切り、ヴエノムはビルから降りて下水道へと入つていく

「頭を食つてもいい社会不適合者の愚か者は何人いるかな？」

「んー…今回は様子見だが人を殺してる奴がいたら食つてもいいさ」

「それは楽しみだ!!」

マンホールを蹴り飛ばし、チンピラ達のたまり場に到着し壁に張り付き、中を覗き込む

「…そろそろだな」

「ああ、ワクワクするぜ」

「しかもガキ共を殺すだけの楽な作業!!」

「チンピラ達の数は14人。見た感じ分かるのは異形2人、発動7人：残りは変形か？」

陸が分析しているとチンピラ達は粉のようなものを吸つて、ソファに座り込んでワイ  
ワイと騒ぎはじめ、ヴエノムはそれを見て顔をしかめる

「おいあれ見ろ、陸。吸うとハッピーになれるヤバいのでエンジョイしてるぞ」

「ああ、あいつらの頭だけは食わないでくれ。俺の頭までパツパラパーになっちまうよ」

「あいつらの脳みそはソニーとシェールより小さそうだ」

2人が話しているとはしゃいでいるチンピラたちの前に黒い渦が現れる

「来たア！行くぞお前ら!!」

「「おおおおおお!!」」

「おつともう移動の時間が、オレ達も行くぞ！」

「エノムは窓」と壁をぶち破りチンピラを追いかけその渦の中へ突っ込む

「いいか、なるべく殺すなよ！とつ捕まえて…」

「情報を吐かせて刑務所へぶち込む！そ�だろ？！」

「ああ！その通り!!」

渦の中を抜けると岩肌の見えるまるで山岳地帯のような場所に出る

「……天井があるな。なんかの施設か？」

辺りを見回すと先程の敵達が女2人、男一人を囮つてているのが見えた

「愚かなヤツらめ…ぶつ飛ばしてやる!!」

地面がえぐれるほどの力で大きく跳躍し、”リーサル・プロテクター残酷な庇護者”は3人の前へと降り立つ

た

—ヴエノムがくる少し前—

「うおつ！！つぶねえ！マジで！！今三途の川見えた!!」

「上鳴あんた…！うだうだ言つてないで交戦して!!」

「いや、俺の個性見たら？戦闘訓練ん時！俺のは”纏う”だけであつて”操作”は出来

ねえの！2人まで巻き込んでしまう！」

「くつ…数が多いっ！」

「2人とも！なるべく離れないように!!」

3人が敵と距離を取り、気づけば壁際まで追い込まれていた  
「おいおい…大人しく殺されな？」

「足搔くだけ無駄なんだ、大人しく俺らのされるがままに…なつとけえ!!」

1人の敵がのこぎり状の剣を3人に向けてふりかざし、2歩、3歩と近づいた瞬間  
3人の視界が黒く染る

「なつ!？」

「うわっ！」

「び、びびったああ!!」

筋肉質な黒い体、こちらを見る白い眼、鋭く歯並びの悪い牙  
それを見て上鳴がハツとしたように話し始める

「も、もしかして路地裏に出るって言う噂の怪物…!!」

ヴエノムは上鳴に近づき、頭を撫でる

「よく持ちこらえたなお前たち。もう大丈夫だ」

「え、ああ…」

「3人相手、しかも子供に大人が雁首揃えて……情けなくてみてられないぜ」  
ヴエノムは敵たちの方へ向き、呆れた顔でそう言つた

「なんだテメエ……バツ!」

剣を持っていた敵は再び歩み寄せるが顔面に黒くて大きな拳がめり込み、来た道をそのまま吹っ飛んでいく

「オレたちは……ヴエノム、”リーサル・プロテクター残酷な庇護者”だ!!」

## N O . 5 B A D D A Y

「お前たちにチャンスをやろう。大人しく投降するなら俺はお前たちに暴力は振るわない。だが攻撃をしてきたら…」

「お前ら!! あいつを殺れえええ!!!」

忠告虚しく、敵は大声を出しながら一斉に襲いかかってくる

「…ニワトリの方が賢いぞ」

ヴエノムは腕をムチのように伸ばして敵たちをなぎ倒しておく

「ぐあっ！」

「お前らみたいな能無し、食う氣にもならん!!」

「ふざけやがつて…死ぬ!!」

一人の敵がナイフをヴエノムの背中につき立てようとするが背中から飛び出してきた触手に捕まれ、そのまま振り回される

「うわあああああ!!」

「ほら避けろ。じゃないと…まとめて死ぬぞ」

歯をむき出しにやりと笑うヴエノムにチンピラたちは恐怖し始める

「た、助けてくれ!!」

「逃げろ!!殺される!!」

「はあ…陸。あいつら逃げられると思つてゐるぞ」

ヴエノムは1人、また1人と氣絶させていく

異形型だろうが、変形型だろうが、彼の前ではもはやアリ同然だつた

「すつげえ…あの数を1人で……」

上鳴がヴエノムの戦いぶりに見とれてると襟を耳郎に掴まれ、そのまま引きずられる

「うえ?!ちよい何すんだよ!」

「何つて…敵同士で潰しあつてるうちに逃げんの!」

「で、でも俺たちを助けてくれて…」

「私たちを守つてゐるとはいえ、ここにいる以上彼は敵です。今は一刻も早く」

「おい、そこのボニー・テール」

氣絶した敵を引きずりながらヴエノムは3人に近づき、八百万に声をかける

3人は攻撃態勢に入るが、ヴエノムは八百万の目線に合わせるようにしゃがみ

「お前、体からものを出してたが…鎖とかロープ出せるか?」

「えつ…」

「あそここの連中縛りあげておきたい。可能なら出してくれ」

「わ、分かりましたわ」

言う通りに八百万は鎖とロープを創造し、ヴエノムにそれを引き渡す「できましたわ」

八百万がロープと鎖を差し出すとヴエノムは立ち上がり八百万からロープと鎖を受け取る

そして八百万が手を引いた瞬間、その手を大きな手のひらで掴んだ

「きやつ！」

「八百万!!」

「このつ!!」

「ありがとう。これはお礼だ、喰うといい。美味いぞ」

ヴエノムは体の中から取り出した袋に包まれているチョコレートを3つ八百万の手のひらに置き、敵を拘束し始める

3人はぽかんとしていたが八百万が1呼吸着いてからヴエノムに話しかける

「あなたは敵：なのですか？」

「オレ達は敵じやない。ヒーローさ」

「ひ、ヒーロー?!もしかしてアングラ系の…?」

「ならさ、ヒーローライセンス見せてくれない？」

「……今は無い。だがいつか必ず証明すると約束しよう」

3人はヴエノムを訝しんで見ていたが敵意がないことはわかつたため、ヴエノムに協力し始める

「今聞いた話をまとめると……ここは雄英の敷地内にある訓練施設、そしてお前たちはヒーロー科の生徒でここに来たが敵どもが襲来。逃げようとするも黒い煙が現れて気がついたらここにいた……」

周辺の安全を確認したヴエノムは3人に近づいて話しかける

「今からお前たちをゲート付近まで連れていく。そして可能ならここから出て教員のヒーローを呼んでこい」

「貴方はどうするのですか？」

「俺達は他の生徒を救出、ついでに黒い煙の個性持ちの捕獲だな。おい、ショートヘア。ここへこら辺にもう敵は居ないな？」

「うん、ここにいる奴らで全員。あと耳郎響香」

「あ！俺、上鳴電氣！」

自己紹介をする2人に八百万は少し驚いていたが渋々口を開き、名前を口にした  
「……八百万百です」

「オレ達はヴエノム!!!耳郎響香、上鳴電氣、八百万百：いい名前だ！お前たちはいいヒーローになれる。」

ヴエノムはそう言うと3人を触手で掴み、USSJの壁を登る

「うわあああああああ!!!!」

「もつといい運び方はなかつたんですの!!!」

「これが一番良い！文句は言うな！」

触手を伸ばし、スティングをしながら移動するヴエノム

そして周囲の状況を確認していると中央広場で一人の男が大きな何かに押さえつけられていたことに気がつく

「お前たち!!予定変更だ!!」

ヴエノムはそう言つて広場へ向かつて急降下し、大きな何かを蹴り飛ばす

「ツ!? 脳無!!!」

「八百万、担架。あと布を作つてこいつの傷口をおさえろ！上鳴と耳郎は八百万が作つた担架でこいつを運べ！」

ヴエノムは3人に指示を出し、蹴り飛ばした大男に視線を向ける

「不味そうな脳みそが丸見えだ」

「ヴィエエエエエ……」

「なんだよお前、邪魔すんなよ：殺れ」

顔に手のひらを着けた白髪の男が殺れと指示すると脳無と呼ばれる大男はヴエノムに迷いなく突っ込んでくる

ヴエノムは腕を盾のように広げ、脳無の拳を受け止めるが凄まじい威力が故に吹き飛ばされてしまった

「ヴエノムさん!!」

「次はあつちだ、脳無」

手のひらの下でにやけながら笑う白髪の男に八百万たちは恐怖し、足が竦むそしてゆっくりと脳無が近づき、その大きな手で八百万を掴もうとした瞬間黒い触手が脳無の腕にまとわりつき、動きを止める

「オレ達を無視するなよ！まだ楽しもうぜ？」

ヴエノムはお返しと言わんばかりに脳無の尖った顔をぶん殴る

脳無は腕で頭を守り、壁際まで吹っ飛んで行つた

「俺達が相手するからさつさと行け!!」

ヴエノムの声で我に返つた3人は相澤先生を担架に乗せ、ゲートの方へ走つていく

「脳無う…!! 何やつてんだよ!!」

「お前はうるさい」

ヴエノムは白髪の男の首を触手で掴んで地面に叩きつける

「ガッ?!」

「さあ、思う存分暴れられるぞーここは広い、何より人もいなければ壊れる建物もない!!!」

ヴエノムは興奮し雄叫びを上げて脳無に突っ込む

そしてそれに反応した脳無もヴエノムに向かつて走り出し、お互いの手のひらを合わせて力比べを始めた

脳無の力は圧倒的だがそれは一般的なパワー系個性や異形型に比べての話である  
「どうしたそんなもんか…?」

脳無が力を出す度に、それ以上の力でヴエノムは徐々に脳無を押し始めていく

「H A H A H A !! もう出ないのか? 自慢の超パワーは!!」

ヴエノムは背中から触手を伸ばし、脳無の首、腰を掴み、そのまま持ち上げ天井に向かつて吹き飛ばす

「地面にぶつ刺さつておねんねしてな!!!」

そして腕と足を触手で包み込み、受け身を取れないようにして地面にたたきつけた爆音とともに砂煙が舞い、脳無の姿は見えない

「……めんどくさいな」

しかし、脳無が再び立ち上がつてくることを“感覚”でヴエノムは察知し、再び構える

「ヴィエエエエエ…」

「ヴエノム、こいつほんとにパワー系か?」

「さつきから攻撃で傷一つつかない：いや、ついてても治つてない感じがするぜ」

「だとしたら再生系の個性も含まれる異形型つて線が濃いな」

「チツ！だつたら真正面からぶつかるのはやめだ!!」

ヴエノムは迫り来る脳無の腕を触手で包み込み、そのまま脳無の背中に貼り付ける  
「動けなくしてから…喰つてやる!!!」

ヴエノムは腕から粘着性のある触手を飛ばし、脳無の腕を固定する

脳無はそれを剥がそうとはせずにヴエノムへ突進するがヴエノムはそんな脳無の顔  
を殴り、口や足、全身を触手で包み込んでいく

モゾモゾと抵抗するが触手をちぎることの出来ない脳無は口や目さえも塞がれる

「さて、いたぐるとするか」

ヴエノムは動けなくなつた脳無を持ち上げ、口を大きく開いてその頭にかじりついた

「思つた通りだ。クソまずい…今日はとことんついてない」

「おい、お前らの目的はなんだ？なんでこんなアホな」とした？」  
男は完全に伸びており、返事はかえつてこなかつた

「陸、こいつどうする？」

「公安に連れていくのはありだな。見たところこいつが首謀者……」

頭に触れようとした瞬間、男の下に黒い煙が漂い始める

「彼を殺される訳には行かないのですよ、黒の怪物」

「そんな枝に服を着せたようなガキなんか喰わない！！」

ヴエノムは黒い煙の中にいる白髪の男に触手を伸ばし、体を掴む

「貴方は私たちの障害になる……だからここで倒されてください」

「ほう？ 言うじやねえか!! お前だけでオレ達を倒せるとは思えないけどな!!」

ヴエノムは思いつきり触手を引き寄せ、首元を掴むがそこに居たのは先程の白髪の男ではなく茶髪のショートヘアの少女

「あうっ!!

「何っ!?」

「では…無事でしたらまた会いましょう」

煙はそう言い残し、どこかへ消え去つた

「チイ!!」

ヴエノムが少女を離すよりも早く、横から緑髪の少年が飛び出してくる  
「麗日さんから手を離せ!!」

ヴエノムはその攻撃を回避し、少年から距離をとる

「待て!!俺達は

「もう…大丈夫」  
ヴエノムは事情を説明しようと/orするも、今度は施設に響き渡る大きな音に遮られる

そして次の瞬間、凄まじい力で吹き飛ばされた

「なぜって?」

「ぐう…本当についてないな!!」

ヴエノムの視線の先にはN o. 1ヒーローオールマイトがいた

「私が来た…!!」

そしてその顔に笑みはなく、後悔と怒りが混ざった表情を浮かべていた

## N o . 6 平和の象徴V S 最悪の怪物

「オールマイト!!」

「緑谷少年！蛙水少女！峰田少年！麗日少女を連れてここからすぐ離れるんだ！」

3人に指示を出すオールマイトに対しヴエノムは吹き飛ばされた位置からさらに距離をとる

「陸、どうする」

「逃げるしかない！当たつてないのに吹き飛ばされたんだ、あれを直接くらつたら一溜りもないぞ!!」

ヴエノムは触手を伸ばして逃げようとするがオールマイトはその触手が天井に張り付くよりも早くヴエノムの腕を掴み、地面に叩きつけた

「ぐあっ！」

「逃がしはしないぞ!!敵!!」

「ケツ！話もせず見た目で決めつけてきやがって！頭にきたぜ!!」

地面を抉りとつてオールマイトの拳と自分の間に差し込み、威力を弱めたヴエノムは腕を掴んで腹部に拳を叩き込む

「悪く思うなよ！お返しだ!!」

「ぐつ!!」

オールマイトが痛みで怯んだ隙をつき、ヴエノムは大量の触手でオールマイトを地面に貼り付け、長い舌を出しながら話しかける

「話を聞け、M r. アメリカかぶれ！お前はオレ達に感謝すべきだ!!」

「感謝だと!?お前たちのせいで子供たちはどれほど恐怖し、後輩たちが傷ついたか：お前に感謝することなんてひとつもない!!」

オールマイトは触手を引きちぎり、ヴエノムの首を掴んで腹部に強烈な一撃を叩き込んだ

「ぐああ!!!」

「痛つづ!!ヴエノム！言い方考えろつて！」

「何も間違つたことは言つちやいないだろ!!」

「死ねええええええええええ!!」  
2人が言い争つていると再び”感覚”が発動し、ヴエノムはその場から逃げ出す

すると先程までヴエノムがいた場所が氷に包まれ、その次の瞬間爆発が起こった

「避けられたか…」

「チイ…避けてんじやねえぞクソ敵!!」

「おい爆豪！ むやみに突っ込むな!!」

「うつせ！ 指図すんなクソ髪!!」

新たに3人の少年の追加、そのうち一人ヴエノムの弱点である音と熱を兼ね備えた個性を持つ爆豪勝己の参戦によりヴエノムは窮地に追い込まれる  
「新手か？ 嬉しいねえ……」

「観念しろ、もうすぐでほかのプロヒーロー達もくる。君は逃げられんぞ！」

構える4人に対し、ヴエノムは両腕を下ろして姿勢を低くし4人と睨み合う

「……いや、逃げるさ」

ヴエノムは地面を力いっぱい叩き、衝撃で浮かび上がった瓦礫を3人の頭上を通るよう放り投げる

「S H I T！ 卑怯者め！」

「今日はたっぷり遊んだ。またいつか会おう、オールマイト」

ヴエノムはそう言うと水難ゾーンの方向に触手を伸ばし、逃げ出す

「待て!!」

オールマイトは腕をつかもうと手を伸ばすがヴエノムは腕だけ江都辺の状態に戻す

サイズが変わったことによりオールマイトは掴み損ねてしまい、ヴエノムはその様子

を見てニヤリと笑つた

「なつ」

「じゃあな、N.O. 1」

ヴエノムはそう言い残し、水難ゾーンの渦の中へと飛び込み、姿をくらました

「…あーしんど」

「おい！オレ様に感謝しろよ!!」

「本当にありがとう…チョコレートとポテト山ほど食いに行こう」

あの後、排水管を通して何とか脱出した江都辺は下水道を移動していた

「しつかし…オールマイトが来るとは。すごい強さだつたな」

「ふん、あのガキ達が来なければオレ達が勝つてたさ。次会うときはオレ達が必ず勝つ  
!!」

「もう戦わねーよ。あと子供たちに怪我させないようにしてたよな、ありがとう」

「約束だからな、オレは悪いやつ以外喰わないし危害もくわえない!!」

そう言うとヴエノムは身体の中へ戻つていった

「ヴエノム、今日はゆつくり休んでくれ」

江都辺も座り込み、スマホを起動させるが水没したのかうんともすんとも言わない

「あー…買い替えか…」

コツン……コツン…

下水道に足音が響く

だが江都辺は構えたりせずに一息着いてから足音の響く方へと声をかけた

「よう、元気してるか？ ホーカス」

「やつぱり気づかれてましたか！ お久しぶりですね、江都辺さん

「なんでここがわかつた？」

「いやー Hヒーローネットワーク Nで情報を見ましてね、”路地裏の怪物 雄英に出現後、逃走。周囲にいる可能性あり” つて。江都辺さんの事だし、排水溝から逃げ出して、雄英から少し離れた下水道にいるんじゃないかなとおもいまして」

「人をネズミかなんかかと思つてない？」

「それと、映像が残つててそこにバツチリ映つてたんで江都辺さん…つていうかヴエノムさん、指名手配つすよこれ」

「あーまじかー…」

はあ、とため息を着く江都辺にホーカスは真剣な顔つきになつてその横にしゃがみこ

む

「ただ助けに來たつてわけじやなさそうだけど…なんか事件か？」

「…実は、先程連絡が来まして

ホークスは懐から2枚の紙を出して、江都辺に渡す

「なんだこれ…船か？」

一枚目はボロボロの船と車の写真、2枚目には5人の男、3人の女性の写真と名前、個性について書かれたものだつた

「船と一緒にはらわれている写真の4名は密航者…全員病院で死亡が確認されます」

「…この人たちは？」

「連絡を受けて4名を助けに来た救急隊員です。こちらの3名は死亡、この女性の遺体がなかつたことからこの女性が3名を殺害した後、逃走したのではないかということです搜査してゐるんです。でも…」

「個性…点滴…どうやつて3人を殺したんだ？」

「…驚かないでくださいよ」

ホークスはそう言つて携帯を開き、中に入つてゐる動画を見せてくる

『おい、息を吹き返したぞ！』

『点滴の用意…グギイ!?』

『きやあああ…!!』

携帯の小さな画面に映つていたのは密航者の体から銀色の触手が伸び、男性の首をへ

し折った

『いやああああ!!』

『なんだこれ…うわあああ!!』

次の瞬間、画面が真っ暗になり何も映らなくなってしまった  
「これは…」

「救急隊員が来る前に応急手当をしていた人が密航者の1人が”隕石”や”異形型”と  
言つてたことを聞いたそうです」

ホークスは映像を少し戻し、銀色の触手のところで停止させて江都辺に再び見せる  
「隕石、異形型、そして粘性のある触手…ヴエノムさんに共通してますよね」

「……ヴエノム、こいつもしかして」

江都辺がそう呟くと肩からラヴエノムが現れ、携帯を覗き込む  
「間違いない…同胞だ」  
シンビオート

## N O. 7 暴動の兆し

「シンビオート…？」

「ホークス、携帯貸してくれるか？俺の壊れてて」

「ええ、いいですよ。これ、予備のです」

「俺も予備持たなきやな……」

江都辺はホークスから携帯を受け取り、会長へ電話をかける

「おばちゃん、俺たちだ」

『江都辺、あなた一体何してるの。今公安にあなたの指名手配のことに関する情報が』  
「悪いがそんなこと話してる場合じやない、今すぐHNでこの動画と女の写真を流して  
指名手配をかけてくれ』

『…やはりあの映像の触手はヴェノムに関係してるのね』

江都辺の声から深刻さを感じとった会長は先程よりもより真剣な声になり、話しかけ

る

「あの同胞の名はライオット。やつは俺たちの惑星のチームリーダーだ。腕を武器へと

変形させ、桁違いのパワーで敵を蹴散らす』

ヴエノムが桁違いと言つた瞬間、会長とホーカスは絶句する  
ヴエノムのパワー、それはパワー系の個性持ちの凶悪敵複数人相手でも弄ぶほど強  
大

そんなヴエノムが”桁違い”と言つたのだ

「これ以後、暴れた映像や情報はないな？」

『ええ、連絡はないわ』

「ということはまだ適応する宿主に出会えてないということだ。オレ達シンビオートは  
適応せずとも暴れられるが力はその分落ちてしまうからな」

「ということは…今の状態なら倒せる可能性があると」

「そういうことだ、ホーカス！だが、もしやつが適応する宿主と出逢えば…オレ達でも勝  
てる可能性はほとんど0だ」

「もうこの女性からは離れている可能性もある、奴らは賢い」

『分かつたわ、すぐにHNにこの映像を渡す』

「ホーカス、お前は空から探して見つけても絶対一人で攻撃しないように。それと船の  
船員についても調べておいて欲しい」

「分かりました。江都辺さんもお気をつけて！」

ホークスは江都辺にそう言うと大きな翼を広げ、夜の空を飛んで行つた

「…おばちゃん、ここ最近で隕石が落ちたって情報は？」

『日本ではもちろん、近隣の国やその周辺の海でも落ちた情報はないわね』

「…分かった。音波系、炎や熱系のヒーロー中心に応援要請してくれ。俺達もライオットを探す』

『何か当てはあるの？』

「ないさ、当てずっぽうに…」

「行くしかねえだろ!!」

ヴエノムは携帯を片付けると、ビルの壁を登つて移動を開始する

「あるとするなら俺たちと同じように下水道を通つてる可能性か」

「堂々街を歩いているかの2択だな』

「何…？すまない、もう一度言つてくれないか？」

「…隕石を乗せた船が沈没、船員は死亡が確認されました。隕石も船の中には…なかつたそうです」

カーテンのしまつた薄暗い部屋の中、白いスーツを着た男が頭を抱え大きなため息を

吐く

「あの隕石を購入した理由を…知つていてるよな?」

「我々の…未来のため」

「我々”ではない!!世界の未来ある”子供達”的めだ!!」

男は頭を下げる部下のネクタイを掴み、部下の首を締め上げる

「いいか!!年々個性は進化しているんだ!!今の世代こそ無事だが……残り10年、いや  
!5年もすれば個性の進化が身体の進化を追い越し苦しむ子供が出てくる!!」

「がつ…ぐう…!!」

「私は…!!ゴホッゴホッ…」

「だ、大丈夫ですか!!」

男は咳き込み、口から血を吐き机に倒れ込む

「構うな!!お、お前たちは…隕石を探してこい!!あの隕石には未知の成分が含まれていたと報告が…ゴホッ、ゴホッ…」

男は机の引き出しの中から注射器を取り出し、腕に刺し込む

「はあ…はあ…なんとしてでも隕石を見つける、この星の未来のために…」

「かしこまりました、英司様」

部下の男は頭を下げ、部屋から出していく

「…個性を使つていないので…私の体を蝕んでいく…クソ…」

椅子の上で再び頭を押え、男はリモコンを操作してカーテンを開けて窓の外を眺める

「私が…この世界を救わなければ…」

同時刻、暗い路地裏では

「おい、ねーちゃん。どした？ 体調悪いのか？」

「俺たちでよけりや…介抱してやるよお？」

「……ぐふ」

フラフラと歩く女性が路地裏に入つていくのを見た2人のチンピラ

下心丸出しでその手を女性にさし伸ばした瞬間

「…あえ？」

口に鉄骨のような太さの針が差し込まれる

「う、うわ…んぐ!!」

「ぐふ…」ぼぼ…」

力なく倒れた友人の姿を見て叫ぼうとしたチンピラだが、口を塞がれてしまう

「んー!! んー!!!」

必死に抵抗するがその力は到底女性のものとは思えないほどのパワーだったため、彼女の腕はビクともしなかった

(なんだ!? パワー系の個性!? 強すぎる!! 誰かツ!! 助け)

女性の頭が銀色の液体に包まれ、大きな口がチンピラの前に現れる

「くくくツツ!!!」

ブチツ

!!!!

路地裏に鈍い音が鳴る

女性の体から溢れ出した銀色の液体はもう1人のチンピラの体に乗り移り、再びどこへ歩き出す

「…あ、ア…あ…さつきのより…は、まし…ダ!!」

ゆっくりと立ち上がりチンピラは自分の体に着いた泥も払うことなく人混みに紛れて歩き出す

「ナカ間…達ヲ…救ウのだ…俺が…!!」

誰にも聞こえぬ小さな声で呟きながら、チンピラはどこかへ消えていった  
暗い部屋で

「ゴホツ…グフツ…時間が無い…!!」

暗い路地裏で

「体が上手く動かせない…」

一人の男の

「この惑星を救うための…」

一人の寄生生物の

「この惑星を奪うための…」

「体が…必要だ!!!」

思いが惹かれあつた

# N O . 8 埋まりし欠片たち

密航船が漂着して1週間後の朝

鳥がさえずり、まだ人々が会社や学校などに移動する時間帯

「こちら江都辺！」

「それにヴエノム!! ようやく見つけた!! ライオットだ!!」

下水道の中で壮絶な鬼ごっこが始まっていた

「ヴエノム…なぜこの惑星を支配していない!? 裏切ったのか!!」

ライオットはヴエノムのような姿ではなく、目が真っ白になつた男の姿をし、背中から銀色の触手を数本出して移動しながら、ヴエノムに針を飛ばして牽制する

「この惑星<sup>ほし</sup>が好きになつた！ただそれだけの事だ!!!」

触手を伸ばしつかもうとするもライオットは触手を避け、銀色の針をヴエノムに向けて放出して下水道を崩しながらマンホールへと向かつていた

「チイ!! めんどくさい!! ライオットは下水道出る気だ!!」

「ちよつと待て！熱くなりすぎだ!!」

「そのままぶち抜いてやる!!」

江都辺の静止も聞かずヴエノムはマンホールを開けようと/or>ライオットに拳を叩き込み、マンホールごと突き破つて地上に出た

「ようやく捕まえた！お前をこのまま」

だが：それは悪手だった

「きやあ！」

「おい！あれって!!」

マンホールを抜けた先、そこは遮蔽物なくちょうど歩道や車道から見える位置にある  
路地裏のマンホール

ライオットはニヤリと笑い、顔の前で手をクロスして叫び始める  
「助けてくれええええ!!」

その声を聞いたことにより周りの市民は大パニックになり、走つて逃げ出し始めた

「ふざけたことをしやがる!!!」

ヴエノムの拳が再びライオットに振り下ろされようとしたその瞬間、空からヒーロー  
ガ”跳んで”きた

「見つけたぞ!!路地裏のオ…怪物！」

現在、ヒーロービルボードチャート6位

そして女性ヒーローN.O. 1であるラビットヒーロー・ミルコ

「ぐう!!」

「夜に出没するつづーお前がなんで真昼間から人襲つてんだ?」

「お前には関係ない!! 家で人参でもむしゃむしゃ食べてな!!」

「ハツ! ふざけたことを言いやがる!!」

ミルコは完全に臨戦態勢を取り、数回足で地面を叩く

その姿を見てヴエノムはため息を吐き、ミルコに哀れみの目を向けた

「…はあ、こんなことはしたくないが…仕方ない。心が痛むぜ」

ヴエノムは触手を出し、ミルコに向けて周囲のゴミ袋を投げそのまま蹴り飛ばす

「お前はもつと痛いけどな!!!!」

「ぐつ!! ツテエし、くつき!!!」

その隙をついてヴエノムは壁に指を突き刺し、上からライオットに触手を伸ばす  
「させるか…よつ!!!」

だがミルコが壁を蹴つて再び顔に蹴りを入れる

「心の痛みなんか気にすんな! そんなのよりも数千倍痛い思いをさせてやる!!」

2人が争っているうちにライオットは立ち上がり、野次馬の中をかき分け走り出す  
「ツ! 待ちやがれ!!」

「どこだ…あの声の…持ち主は…!!」

一際目立つ摩天樓、それは世界的に活躍するライフ財団本社  
サポートアイテム、コスチューム制作から車、医療関連の機械、環境保全に孤児院や  
学校への寄付など幅広く活躍している日本が誇り、世界で活躍する超企業  
「いつも遠くから見てたけどやつぱりでかいなあ」

そんなビルの下に立ち、見上げているのは最速の男にしてN.O. 3ヒーロー”ホーク  
ス”

「お待たせしてしまい申し訳ございません、ホークスさん。本日、案内させていただきま  
す。ライフ財団代表取締役副社長の渡良華です」

「いえいえ！俺が早く着きすぎたんですよ！よろしくお願ひします」

「ふふ、流石は最速の男ですね。では早速案内させていただきます」

白衣を纏つたライフ財団職員が、お辞儀をして車内へ足を踏み入れる

「これは…凄いですね」

中心にエレベータがあり、それを囲むように研究室、開発室が設置されている光景に  
ホークスは目を奪われる

「本社では主にヒーローコスチューム、サポートアイテムの製作、そして医療関係の薬の調合及び機会の製造を中心に行つております。あちらの研究室では…と、こんなこと話している場合ではなかつたですね、どうぞこちらに」

「失礼します、英司様。ホークス様をお連れしました」

扉が開き、そこには少しやつれた青年が椅子に座つたままタブレットとパソコンを触りながら出迎える

「ああ、済まない。もうそんな時間か！ ありがとう、渡良副所長。そしてようこそ、ホークス。ライフ財団へ」

かると  
軽翔  
えいじ  
英司さん

「こちらこそ、貴重なお時間を頂きありがとうございます。」

英司さん

「では私は廊下におりますので、何かありましたら」

「して、本日の要件は？」

「…今から約一週間前、密航船が漂着したのは知つてますね？」

「ええ、もちろん」

「最近データを復元することに成功したのですがその中にライフ財団の名前で何かを購入した履歴がありました。一体何をご購入なさつたんです？」

「ああ、隕石の一部です」

「隕石…え、隕石!？」

思わず素つ頓狂な声を出すホークス

「そ、それはなんで…?」

「その隕石には未知の成分が付着していたようとして…私も研究者の端くれ。実際に研究し、コスチュームやサポートアイテムなどに組み込むことが可能ならばヒーローの皆さんのお役に立てるかと思いまして…ゴホツ」

「な、なるほど」

「それともうひとつは…個性細胞障害の治療法のきつかけが欲しかった」

軽翔はゆっくりと手元にあるリモコンを操作し、ホークスに隠れていた足元を見せる

「つ！」

そしてホークスは軽翔の両足を見て驚いた

それもそのはず、彼の両足は膝から下がなかつたのだ

「私は先天性個性細胞障害でね。昔は走つたりできたんだが…」

足を擦りながらホークスに悲しい顔をしながら笑いかけながら話を続ける

「私自身もう長くない。だからせめて死ぬ前に個性細胞障害を少しでも緩和させる薬を

作り、私のような人達のために…と思いまして

「…ですか」

ホークスが立ち上がり、電話をしようとした直後に窓ガラスが割れる音が部屋に響き渡った

「うわあ!!?

なんと振り返るとそこには目が真っ白で口から泡を吐き出しながら軽翔の首を握りしめている男がいたのだ

「軽翔さん!!!」

(全く…気づかなかつた…!!)

剛翼で男を軽翔からはじき飛ばし、ゆっくりと持ち上げる

「軽翔さん！大丈夫ですか!? 軽翔さん！」

「うう…」

「この男の個性かなにかか…!?」

大量の汗をかきながらうなされる軽翔をホークスは抱えながらそのまま病院へと空を飛んで運んでいく

その後の検査の結果、軽翔は酷い発熱に加えて心臓が極度に衰弱しており、今すぐにでも亡くなってしまうかもしれないとのこと

「どうしよう……」

「副社長、今は社長の体が耐えてくれることを信じるしかないですよ…」

「…くそつ！なんで社長がこんな目に…!!」

優しく軽翔の手を握っていた渡良は涙拭い、見舞いに来ていた社員たちに笑顔を振りまく

「…そうね。皆、会社に戻るわよ！彼の夢のためにも頑張らないと！」

「「「はい！」」」

小声で返事をし、みな病室から出ていったことを確認し渡良は軽翔の頬に優しく手を添える

「今はゆつくり休んで…英司」

そう告げ、渡良は病室を出ようとした瞬間、軽翔が寝ていたからだを持ち上げて窓の外を眺めていた

「…英司？」

「…い」

「目が覚めたのね！良かつ」

再び軽翔に近づこうとしたその瞬間

「やはり…良い宿主だ…!!」

軽翔とは違う邪悪な声に渡良は歩みを止める

「貴方…誰？」

軽翔がゆっくりと顔を動かし、渡良の方へ向く

「……華？」

先程の邪悪な声ではなく今まで通りの軽翔の声、今まで通りの軽翔の顔が見える  
「英司…？」

渡良はいつもの軽翔に安心するよりも先に不思議な感覚に襲われる

そもそもそのはず、先程のように目の下のクマがなく、頬もやつれていらない軽翔が目の  
前にいるからだ

「華、直ぐに会社へ戻ろう」

「え、英司!! なんで脚が……？」

「…そのことは後で話すさ」

怪しげに笑う彼は再びどこかいつもと違う雰囲気となり、歩き出す

「私…いや、私たちがついに世界を救う時が来た」

何が起きているか分からぬ顔をして自身の社長を見る部下たち

そのことをなんとも思わず楽しそうに歩いて病院を出る社長

「ん…!？」

1人の社員が鏡に映つた軽翔の姿を見る  
その姿は

言い表すことが出来ないような恐ろしい銀色の姿をしていた